

開智学院小学部の指導目的は「能力開発」です。高い学力を形成するために必要な処理能力を、習慣化して身につけさせていきます。そのための指導手段として「算数」を活用して指導訓練をおこなっていきます。

「算数」の勉強は、ちょうど楽器の練習によく似ています。習い始めた当初は生徒たちはなかなか思うように楽器が操れず、スムーズに演奏できずに失敗も重ねます。しかし、根気よく練習させていくうちに生徒たちは練習に没頭し始めて、意外に早くその扱いに慣れていきます。少しできるようになると、楽しくなり自信もつき始めてもっと練習したくなります。「算数」の学習もこれと同じで、最初は単純な計算でつまずいてばかりいた生徒たちがミスや失敗を意識させない教師の誘導によって少しずつ成功体験を積んでいくと、自分の力でできたことがうれしく楽しくなって、本当に真剣な表情でどんどん練習にのめり込んでいきます。本学院でどの生徒も伸びていくのは、本人に「失敗やミス」を意識させない独特の指導方法にあります。本学院では、初めのうちはミスや失敗を指摘しません。30年間の指導経験の蓄積から、生徒がつまずく箇所はすべてわかっている、始めから想定済みです。生徒がつまずいている箇所を上手にフォローし気づかせて少しずつミスを減らしていきませんが、決してネガティブな取り上げ方はしません。間違いやミスを失敗ではなく、正解を得るための材料として活用させていきます。そのため、生徒たちはどんどん自信をつけていき、練習すればするほど上達するうれしさを感じていきます。そして、気づかないうちに問題のレベルを次第に上げていき、気づいたときには難しい中学入試問題を解いています。そうすると、次第にもっと難しい問題にチャレンジしたがるようになっていきます。

「教えられて伸びる子」はいません。自分で考え、自分でやった経験を積み上げていく中でしか実力や応用力は身につけません。説明してもらっただけですべてを理解し、覚えてしまう生徒は今まで見たことがありません。「教え込む」という行為は本人のためにはならず、教える側の自己満足になるだけです。本学院では教師は案内役であり、生徒と問題や課題を共有して一緒に「解」を作り上げていく併走者という姿勢で接します。本当は、経験豊富な教師は生徒のつまづく箇所から生徒の思考プロセスやゴールまでのすべてをお見通しですから、生徒をうまく誘導して壁を取り除いてあげるわけですが、生徒が自分の力でできた、やり遂げたという自信と満足感を感じるように導くわけです。こうして本人の主体的に取り組む姿勢がうまく転がり出せば、もうしめたものです。それはちょうど自転車乗りの練習にも似ています。初めは補助輪をつけ、生徒が感覚を掴んだら気づかぬうちにそれを外し、荷台を押さえてあげていた手も次第に離していきます。本人は自分の力で走れることに気づき、うれしくてもっと遠くまで走って行きたくくなります。あたかも学習のフィールドを自分の意思と力で自由に走り回っているようです。実に楽しそうに自信に満ちた表情で。こうなればしめたものです。こちらも次第に難しい成果を要求し、目標値を上げていきます。教育は、指導者と指導される側

とのコラボレーションです。本学院の指導の具体的な目標は上位20%に育てあげることであり、結果としてトップレベルの高校に進学させることです。従って、最終的に生徒に期待し要求する内容はレベルの高いものですが、生徒はいつの間にか気づけばその高みに立っています。これは30年間の試行錯誤と指導経験、そして膨大なデータの蓄積から本学院が作り上げてきた独自の指導法とその理論の実践によるところです。

本学院小学部が「算数・数学」を指導手段として重視するには理由があります。「算数・数学」ができる生徒は全般的な学力が高い傾向があります。なぜでしょう。「数」を取り扱うことは抽象的な概念を理解して、それを具体的な道具として取り扱うことです。高いレベルの思考努力が求められます。また、ルールに従って、規則正しく考えを進めていかないと「解」が得られません。思いつきや知識の単純な当てはめだけで正解が得られるものではありません。難度が上がるほど複雑な判断を重層的に積み上げていくことが求められ、構造的、多面的に物事を見る習慣が育まれます。論理を積み上げていく思考の過程で、筋道を立て順を追って組み立てていく姿勢とともに情報を整理する力が身につけていきます。更に、対象(設問で問われた課題)を客観的に分析していく作業が必要です。冷静に忍耐強く分析し、結果を積み上げていく姿勢が養われます。また、問題の中から必要な情報だけを拾い出し整理して、順序立てて組み立て直していく思考の再構築も必要です。こうした思考訓練を段階を追ってステップアップしていくことができます。練習を積むごとに処理スピードは増していきますので、本人が手応えを感じられ、自信に繋がります。

「国語」のように語彙力以外にも幅広い知識や経験の量に関わる総合力が問われる場合、問題量をこなしてもすぐには手応えを感じることはできません。また、ものの見方やとらえ方(視野)がどれだけ広がり大人に近づいているかが文章読解の決め手となりますので、今までにどれだけ豊かな言語体験や経験を積んできたのか、つまり現時点までに生徒が身につけてきた総合力の質と量が国語力の決め手となって結果に反映されます。「国語」における文章読解力が机上の問題練習だけでは伸ばせないのはこのためです。しかし、こうした「国語」に求められる思考力も上記のとおり「算数・数学」への取り組みによって養い育てることができます。ですから、本学院では「算数・数学」をただ単元ごとに問題の解き方を覚えるような狭い範囲で扱うのではなく、生徒たちの思考力、処理能力を鍛えて伸ばすツールとして活用しています。本学院ではどの教科も横断的に取り扱いますが、コンピューターに例えて各教科をアプリケーションソフトだとすれば、「算数・数学」は思考のオペレーティングシステムの質を向上させるために活用していると言えます。

本学院は、教育に投資される保護者の方々に対してプロとして必ず具体的な結果を提供することが使命だと考えます。そして何より、子供たちにここで学んだ意義を感じてもらえることで、私たちの仕事に意味が生まれると考えます。是非、本学院の指導を有効に活用してください。